

ocean⁺α

©ocean+ α ウエブマガジンの二次配
付および画像・文章の複製、二次使
用を禁じます

ニュー
アイドル
小太朗
登場!

Photo&Text・Takagi Ochi
Special Thanks・Dive Estivant
Design・Panari Design

久

行

Part.3

米

島

2017年の久米島は例年とは違う顔を見せてくれた。
海の主役に名乗りを上げたニューアイドルから、
視点を変えることで見えてきた魅力、そして、新たなダイビングスタイルまで。
古から、「球美の島」とその美しさを称えられてきた久米島。
さらなる輝きを放つこの海の最新情報をお届けしよう。

球美の
島の
新顔たち

“Kotaro”

フレンドリーなアオウミガメ、 小太郎に夢中！

注目の的は、人馴れした小さなアオウミガメ。身体を優しく揺かかれるのが大好きな、その名も“欲しがり”小太郎！「シチューガマ」や「ウーマガイ」でダイバーたちの人気を集めている、小さなアオウミガメのメスだ。自分自身、ウミガメをこんなに愛おしいと思ったのは、初めてのこともかもしれない。ちなみに、命名はダイブ エスティバンのオーナーガイドの川本剛志さん。

なぜ“欲しがり”で、なぜメスなのに小太郎なのかは、以前 ocean+ α のヘッドラインに詳しく書いたが、餌付けをしているわけでもなく、身体がかゆいのを掻いてあげたりして時間をかけて馴らしていたら、まったく逃げなくなるところか「掻いて〜」とばかりに、近寄ってくるようになったのだとか。

「もう1週間も姿が見えないと、心配で心配で」と川本さん。このかわいい小太郎にメロメロなのだけれど、どうやら小太郎だけでは逢えない日が寂しくなるのか、ほかにも同じ方法で馴らし始めているらしい。

「今ではモジャ美もだいぶ慣れてきたし、小三郎というカメも増えそうだよ」と川本さん。どんだけ寂しがり屋なんですか？

01, この子はモジャ美と呼ばれている、別のポイントに生息している小さいアオウミガメ。こちらかなり慣れていそうだ 02, 逃げることもなく、川本さんの腕の中で安心して体を揺られる小太郎

ゴロゴロという音が聞こえてきそうなほどうっとりして見える

01

02

久米島紀行 Part.3 球美の島の新顔たち
2017 Summer [Kume island]



今シーズンは「イマズニ」の海中を覆い尽くすように群れていたオオメカマス

イマズニでは、
オオメカマスが
主役級に!?

01, 人を包めそうなほど巨大なイソバナ
02, ドロップオフでくつろぐニセカンランハギの群れ 03, 「カスミポイント」のカスミ
チョウチョウウオの群れ

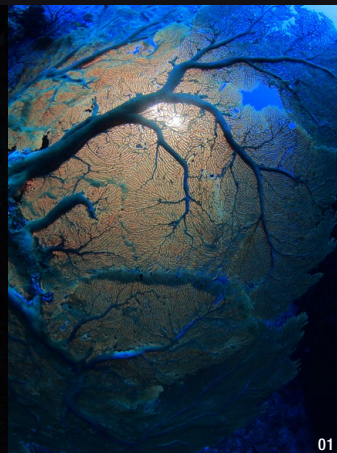
2017年は、「『イマズニ』のギンガメアジが少ない」と聞いてはいたけれど、その代わりに同ポイントを席卷していたのが、オオメカマス。普段は群れていても、バラクーダと違ってなかなか主役級にはなれないちょっと脇役色の強い存在ではあるのだけれど、ここの群れ具合が半端ない。まるで雲海のように、海中の視界全体を覆い尽く

していた。

しかもたくさん群れているからか、ダイバーへの警戒心も少ない。これだけ寄りやすくこれだけ群れていれば、時間をかけて撮影したくなるし、個体数の少ないギンガメアジを捕って余りあるくらいに、しっかり海の主役を務めていた。でも最近では、7月に入ってギンガメアジの群れがかなり大きく



地形スポットも充実している「シチューガマ」



01



02

なってきたという現地情報も。

「カスミポイント」には、その名前の通り無数のカスミチョウチョウウオがドロップオフの際のブルーウォーターに乱舞している。ある方法で、このカスミチョウチョウウオをさらに密集させることができるのだけれど、それは現地に行ってからのお楽しみということで。



03

久米島紀行 Part.3 球美の島の新顔たち

2017 Summer [Kume island]

The background of the entire page is a photograph of a clownfish swimming through a field of white, bleached coral. The coral appears as soft, out-of-focus shapes, creating a dreamlike and somber atmosphere. The clownfish is a vibrant orange with white stripes, providing a sharp contrast to the pale background.

美しい海中景観 白化がもたらした、

沖縄では2016年の夏、高水温が続き、あちこちでサンゴが白化し、死滅した。無残なガレ場になってしまったサンゴもあるが、白化は死滅寸前にサンゴたちが見せる儚くも美しい最後の晴れ姿のようにも見える。

実はサンゴだけでなく、クマノミたちが共生しているイソギンチャクも白化する。しかし、多くのイソギンチャクは、温暖化による白化から立ち直り、徐々にいつもの姿を取り戻してきているようだった。

このクマノミの幼魚が共生するイソギンチャクも、クマノミたちを見守りながら、復活への道を辿っていた。

Resurrection

エスティバンのガイドたちの得意技は、ただきれいだったり、珍しい生物を見せてくれるだけでなく、魚たちがどんな生活をしているかまで説明し、そしてそれを実際に海中で見せてくれることだ。今回もさまざまな魚たちの生態を紹介してくれたのだけれど、一番興味を持ったのが「イマズニ」のケーブの中にいた、シモフリタナバタウオが窪みの天井に産みつけた卵を守っているシーン。

シモフリタナバタウオの卵保護は初見だ。「こんな風に卵を守ってるんだな～」と、かなり長時間観察させてもらった。「シモフリタナ

初めて見た、 シモフリタナバタウオの 卵保護

バタウオが卵を産んでから卵がハッチアウトするまでは、1週間!」と川本さんが胸を張る。

このほかにも、定番のヤマブキスズメダイやセダカギンボの卵保護や、イソギンチャクエビの抱卵など、相変わらず魚たちのさまざまな生態を見せてもらった。

久米島にきて、毎回心残りに思っていることがある。それは、スミレナガハナダイの放精・放卵のピークになかなか遭遇できないということ。

ピーク時は、婚姻色を出して、メスにチョロチョロとちょっかいを出すオスがいたると

ころで見られるらしい。今回は、潮の当たり具合なのか、数匹のオスが婚姻色を出し、挨拶程度にメスを追いかけるだけだった。どうにかこうにか撮影したけれど、水深30mオーバーなので、できるだけシャッターチャンスが欲しいところだ。

できることなら、婚姻色で美しくなったボディを誇示するように、メスに激しくアプローチするオスたちの大饗宴を見たいものである。

01, スミレナガハナダイのオスがメスに婚姻色を出してアピール 02, 体がスケルトンなので、抱卵している様子がよくわかるナデシコカクレエビ 03, サンゴに産みつけた卵を守るセダカギンボ 04, 久米島取材では、定番となっているヤマブキスズメダイの卵保護 05, 卵を守っているらしきハナダイギンボ



01



02



03



04



05

今回の取材で一番気になったのは、実はこのシモフリタナバタウオの卵保護だった。手前の天井にある黄色い塊が卵

久米島紀行 Part.3 球美の島の新顔たち
2017 Summer [Kume island]

ocean+α

©ocean+α ウェブマガジンの二次配付および画像・文章の複製、二次使用を禁じます



Information Link
<http://dive-estivant.com>



関連情報HPへ

Tonbara

大物を狙うなら、
やっぱりトンバラへ

「トンバラ」の岩礁に打ち付ける波をバックに泳ぐイソマグロの群れ。男っぽい海中景観

久米島の最南端にボツンとある、烏帽子のような形をした岩礁「トンバラ」は、久米島でもっとも大物が狙えるポイント。エントリーすると、50mは抜けているのでは、と思うような透明度。そして、目の前にはどこまでも続いているかのような巨大な岩礁の海

底が広がっている。透明度で視界が開けているせいもあるけれど、何度潜っても、この男性的で豪快な海中景観に一瞬見惚れて息を飲む。冬にはハンマーヘッドシャークの群れが出たり、周囲でザトウクジラが見られたりすることもある。

久米島紀行 *Part.3* 球美の島の新顔たち
2017 Summer [Kume island]

ダイナミックな出会いが
興奮を呼び起こす

夏場の主役は、岩礁に激しく打ち付ける波と一緒にイソマグロの群れを堪能できること。潮の流れの微妙な当たり具合によって、見せやすかったり見せにくかったりするらしく、スタッフのエントリー前の潮読みは慎重だ。

潮裏にボートをアンカーして、エントリーし、ゆっくり潮の当たるほうへと移動していく。徐々に流れを感じるようになり、時にはツルツルした岩肌のところどころに空いている小さな窪みに指を突っ込んで、前進しないと進めなくなることもある。まるで横向きにロッククライミングしてるみたいで、それはそれでおもしろい。ロッククライミングを終えたあと、目の前に10数匹のイソマグロの群れが姿を見せた。

この日はその後もオマケがあって、単体ではあったけれど、この時期には珍しいハンマーヘッドシャークを目撃。その後には、深場からハンマーヘッドシャークよりレアだというレオパードシャークが悠然と泳いでこちらに向かってきた。

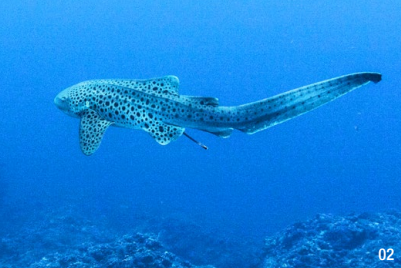
確率は少ないが、ジンベエザメが出ることもあり、予期せぬ大物との遭遇が久米島でのダイビングをより一層思い出深いものにしてくれる。

01、イソマグロの群れ 02、深場から姿を見せたレオパードシャーク 03、流れに逆らって岩肌を掴みながら進む。まるで横ロッククライミング状態 04、ゴツゴツした岩肌と抜けるような透明度 05、50mは抜けていると感じる透明度

港を出てすぐに外洋に勇姿を見せる「トンバラ」は、久米島の象徴の1つでもある



01



02



03



04



05

海中に煌々と設置
された水中ライト



ブラックウォーターダイブ® in 久米島



日本では今とこ珍らしいウダ
リボウズギス属の一種の稚魚



エスティバンでは2016年から、ブラックウォーターダイブ® (以下BWD) の先駆者、水中写真家の峯水亮さんをゲストに迎えて、BWD ツアーを開催している。

BWDは世界中でブームになりつつあり、さまざまなスタイルで行われている。エスティバンでは、ドロップオフの淵に半円状になるように30個以上もの水中ライトを設置して、その明かりに集まってきた幼生などを撮影するスタイルをとっている。つまり、ステージが用意されて、ほとんどそのポイントから動かないで撮影ができる安全な方法を採用しているのだ。

もともと、エスティバンのガイド・吉田健太郎さんがビーチエントリーでできる内湾で始めたそうだが、峯水さんのアドバイスを受けて外洋に面したポイントでツアーをスタートさせたら、これが「おもしろい!」と人気を呼んだ。以来、「夜は、飲み!」と思っていたゲストを夜の海に導くことになった。

吉田さん自身は、オリンパスのコンパクトデジタルカメラの「TG-4」とRG Blueの水中ライトだけで撮影していて、それでも十分きれいな撮影ができることから、気軽に参加してくれるゲストも多いのだとか。



自分もその様子を撮影してみ、次回はワイドでの雑感撮影だけでなく、しっかりマクロレンズを付けたカメラで参加したいと思ったほどだ。しかしこのとき、運が良いのか悪いのか、ナイトマンタまで登場し、それを撮影できたのはワイド雑感撮影をしていた僕だけだった。個人的にはラッキーだったけれど、マンタが姿を見せるとBWDの肝心の被写体が食べられちゃうから、手放しには喜べないとのこと。

「ていうか、今までBWDやって、ナイトマンタが出たのは初めてのことでしょ。やっぱ越智さんがいたからですかね〜」と言われるとちょっと複雑な心境になったけれど、ゲストは喜んでいたので、まあいいかな。

01、「コンデジでも案外キレイに撮れるので、気軽に参加してください」と笑う、ガイドの吉田健太郎さん 02、クダリボウズギス属の一種の稚魚を撮影する、峯水カメラマン 03、いきなり乱入してきたマンタ 04、船上から海中に設置されたライトを眺める

ダイブ エスティバンの
精鋭ガイドたち



ダイブ エスティバンの
クラブハウス



Diving Service "Dive Estivant"

久米島の海の美しさを 探求し続けるエスティバン

オーナーガイドの川本剛志さんは、世界の海の日本人ガイド集団「ガイド会」の会長も務める。川本さんを筆頭に、海をこよなく愛する精鋭ガイドたちが久米島の海中を案内してくれる。

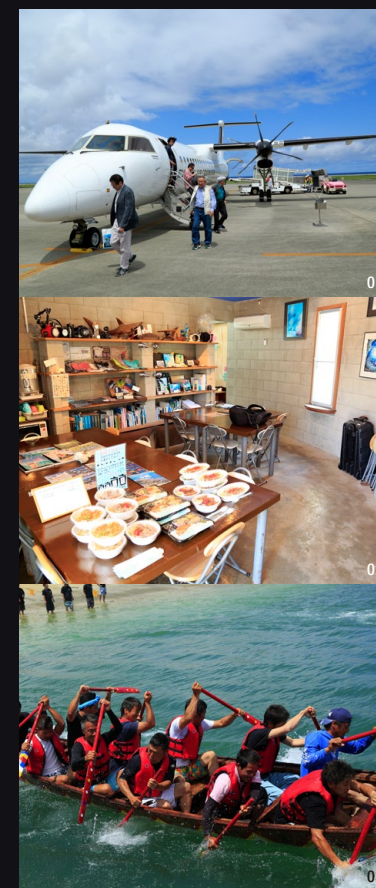
ゲストに楽しんでもらうために、潮の流れを読むこと、生態観察に関して日々精進している姿勢は「これぞ、プロガイド集団」と思わせてくれるに違いない。

久米島一の大型ダイビングボート、53フィートのyou-go号と38フィートのエスティバン1号の2隻を所有。どちらも広々としたトイレとドライエリアがあるのがうれしい。ビギナーやシニアダイバーのケアから、データを基にした生態の解説、潮を読んで大物を当てるダイビングなど、フォト派やマニアックなダイバーのリクエストにも対応可能だ。

DIVE ESTIVANT

ダイブエスティバン

〒901-3108 沖縄県島尻郡久米島町比嘉160-69
Tel.098-985-7150
<http://dive-estivant.com>



01、琉球エアコミューター (RAC) のプロペラ機で久米島入り 02、クラブハウスの内部 03、取材のタイミングでちょうどハーリーレースが開催されていた